

# 『戀無乏』訓疑

賀 古 明

①何時はしも恋ひぬ時とはあらねども夕片設けて恋無乏

(11二三七三 正述心緒 人麿集)

②我妹子に恋無乏夢見むと吾は念へど寝ねらえなくに

(11二四一二 正述心緒 人麿集)

③隱沼の下ゆ恋者無乏妹が名告りつ忌むべきものを

(11二四四一 寄物陳思 人麿集)

④思ふにし余りにしかば為便乎無美吾は言ひてき忌むべきものぞ

或本の歌に曰く 門に出でてわがこい伏すを人見けむ  
かも

一に云ふ 無乏出でてぞ行きし家のあたり見に

(12二九四七 正述心緒)

万葉集中、右の四歌のみに用いられている「無乏」は今日まで、すべて、形容詞スベナシ類の語として訓まれている。この主な諸訓を挙げると左の通りである。

## ①の歌

スベナシ——代匠・拾穂・考(無為と改字) 略解(考に同じ)  
古義・新訓・全釋・總釋・總索引・定本・全註釋

スベナサ——童蒙  
スベナキ——童蒙

新考は「恋社益」と改め、コヒコソマサレとす。

## ②の歌

スベナミ——拾穂・童蒙・新考・定本・全註釋  
スベナカリ——代匠・略解(無為)・古義・新訓・全釋・  
總釋・總索引  
スベナシ——考(無為)

③④の歌は、諸訓、みな、スベヲナミ、である。

この訓は、既に、考・新考に於いて改字説が述べられていることによつても、用字上からみて、無理な訓であることは明らかである。

上記の通り代匠記に於いては、唯、すべてスベナシ類に訓んでいるが、何らの根據も明示していない。真淵は「柿本朝臣人麿歌集之歌考」に於いて、「『恋無為』今本無乏と書てすべなしと訓、此次下にも二所あれど、乏の字はことわりなし、為の草を乏と書しを誤れるものなり、今改」とし、コヒテスベナシと訓んでおり、略解は、これを受けついで、

「乏は為の誤ならん、次下 隱沼の下ゆ恋ふれば無乏も、一本無為とあればことも必誤れる也」としているにすぎない。

更に、古義は、「無乏は、スベナシなり、乏字、スベとよむ義は未ダ詳ならねど、此下に無乏、又無乏、十二に、無乏などあれば、古スベと云に用ひし字なるべし(略解に、乏は為の誤なり、といへるは、推当なり)一とし、略解の誤を否

定せることは肯定し得るも、前半の説は、鶏・卵説にすぎず、附訓の根拠とは全くならない。新考は、遂に「恋社益の誤字として、コヒコツマサレとよむべしや」と、特有の改字説を述べながら、②の歌の語釈の部に於いては、古義の、鶏卵説にかへり、受けついでいるにすぎない。

これ以後に於いては全くすべてスペナン類に訓むのみで、何ら再考されていず、春日政治氏が「乏をスベに当てたことについては定説がない」(総釈)とされているように、唯、古来の訓を踏襲しているにすぎない。

唯、無乏がスペナン類に訓まれて来た抛り所とみられるのは、他の歌との類歌的な相似性から推定されたものと思われる。

しかも、類歌に於いて、特に、それに含まれる情意表現の語句は、類語・類句と入れかわることはいうまでもないが、更に、異語・異句とも入れかわつてるといふ変動性が見られることが、かなり多い。したがつて、漠然たる類歌の相似性のみによつて、異字同訓説を主張することはきわめて危険である。

このことについて、今、詳説の便宜上、③④及び④の一云の他に、更に、③の類歌(11二七一九)及び④の類歌(11二五五一)を、左の通りに、配列、分解して、論をすすめることとする。

A ①「思ふにし余りにしかば」②「為便無三」③「出でてぞ

行きしその門を見に」 (11二五五一)

B ①「思ふにし余りにしかば」②「為便平無美」③「吾は言

ひてき思むべきものを」 (11二九四七)④

C x「……………」②「無乏」③「出でてぞ行き

し家のあたり見に」 (11二九四七の一云)

D ①「隠沼の下ゆ恋者」②「無乏」③「妹が名告りつ思むべ

きものを」 (11二四四一)③

E ①「隠沼の下に恋ふれば」②「飽不足」③「人に語りつ思

むべきものを」 (11二七一九)

右の五首のそれぞれの類歌性関連に於いて、

A ① || B ① A ② || B ② A ③ || C ③ の関係があるとして

も、必ずしも、C x || B ① ( || A ① ) とはいえない。仮りに、

これを一応肯定しても、A ② ( || B ② ) || C ② であると断定

することは出来ない。即ち、D と E とに於いて、

D ① || E ①、D ③ || E ③ であつても、D ② と E ② とは、全く

別語であるからである。まして、B ③ || D ③ であるからと

て B ② || D ② は成立し得ない。

B ③ || D ③ || E ③ であるとしても、B ② と E ② とは全く別語

であり、D ② と E ② とも全く別語である故に、B ② と D ② とは

同類訓ではあるとはかぎらない。従つて、A ② は C ② とはま

た同類訓でなければならぬことはなく、同ら、B ② は C ② と

は別訓別語であり得るといひ得よう。

故に「無乏」は唯単に類歌性のみによつてスペナン類に訓

まるべきでなく、更に、その用字に沿つて忠実に訓まれねばならない。

しかも、「乏」字は、在来、初記の四歌を除いては、すべて、トモシ類に訓まれており、スベには、周弊・須別・須便・須敵・須敵・須弊・須倍・須部・須辨・須邊・為便・為部・便ハ計九十余例、但し無乏は除いての文字が用いられているのみである。

更に、この論をすすめるために、万葉集中の、トモシ類の性質を検討することが、必要となる。トモシ類の語例は、万葉集中、四十九例あり、この中「乏」字を用ひているものは十五例である。

今、この四十九例を、作年代順に配列すると、次の如くである。

天智代	乏之	4	四八九	鏡王女
全	乏	8	一六〇七	鏡王女
持統7	乏寸	2	一六二	天武天皇
8	乏吉	1	五三	(藤原ノ御井)
9	乏	13	三二二九	(献弓削皇子)
文武2	乏	9	一七〇二	(献弓削皇子)
大宝元	友師・乏	1	五五	調首淡海
元	乏寸	3	二九〇	間人大浦
元	友數	9	一七二四	島足

養老3	乏	4	五三三	大伴宿奈磨
養老6	乏寸	8	一四六八	小治田廣瀬王
7	乏敷	6	九一三	車持千年
神亀2	乏	6	九二〇	金村
3	乏	6	九四四	赤人
3	乏	2	三五八	赤人
5	乏	6	九五四	膳王
天年2	等母斯佐	5	八六三	旅人
4	乏見	3	三六七	金村
8	等母之佐	15	三六五八	遣新羅使
19	等母之	17	三九七一	家持
19	等母之伎	17	三九九三	池主
19	等母之美	17	三九八四	家持
19	等母之夫流	17	四〇〇〇	家持
19	等母志美	17	四〇〇六	家持
21	等毛之伎	18	四一二五	家持
天年	乏	19	四一五四	家持
勝宝	等母之久	20	四三六〇	家持
2	等毛之佐	20	四四二五	昔年防人
7	乏佐	4	六三四	對湯原王娘子ノ歌
天年未詳	乏寸	4	六八九	大伴坂上郎女
登聞思佐	乏	8	一五六一	大伴坂上郎女
之知(乏卿)	乏	8	一五六二	巫部麻蘇娘子
乏	乏	8	一六一一	笠継女王

作年代未詳乏

10 一九九七 (雑 七夕)

乏備 10 二〇〇二 (雑 七夕)

乏 10 二〇〇四 (雑 七夕)

乏牟 10 二〇一七 (雑 七夕)

令乏 10 二〇七九 (雑 七夕)

乏 7 一七五 (霸旅)

乏左 7 二二〇八 (霸旅)

乏雲 7 二二一〇 (霸旅)

乏 10 一八二〇 (詠鳥)

乏 10 二一五一 (詠鹿鳴)

乏焉 10 二一五二 (詠鹿鳴)

乏 10 二二三〇 (詠風)

令乏 11 二五七七 (正述心緒)

乏 12 三一二二 (問答)

等毛思吉 14 三五二三 (未勘相聞)

右の表中、作年代の明瞭なもの、三十四例中、天智代の鏡  
 王女の歌が最も古く、天平勝宝七年の昔年防人の歌が最も新  
 しい。(但し、この内、天平年末詳歌、五例を含む。)

右、三十四例中、神龜五年までの、十七例の内、「友師」

(五五)「友敷」(一七二四)の二例を除いて、すべて「乏」を  
 用いている。しかるに、天平以後は、十七例中、字音仮名のも  
 の、十一例「乏」字を用いるもの六例である、しかも字音仮  
 名による十一例中、六例は、家持の作品であり、唯一例(四  
 一五四)に於て「乏」を用いている。

字音仮名の例中、家持以外の人のものは、旅人(八六三)  
 遺新羅使(三六五八)池主(三九九三)昔年防人(四四二五)  
 大伴坂上郎女(一五六一)の五例であり、家持に近親な者の  
 歌が、家持の手によつて書き改められたと見るべきものであ  
 り、すべて、家持内の歌である。

以上のもの以外の、作年代未詳の歌、十五例中、家持の手  
 を経ている東歌の一例(三五二三)を除き、十四例は、すべ  
 て、「乏」字を用いている。これらの内、九例が卷十所収の  
 ものであり、更に、この内、四例は、人麿歌集中の歌(すべ  
 て、七夕の歌)である。なほこの他、卷七所収三例、卷十一  
 卷十三、各一例であり、結局、家持の手によつて、字音仮名  
 に書き改められたと考えられるものを除いては、すべて「乏」  
 字を用いている。

したがつて、天平以後の用字例は、「乏」の訓を決定する  
 傍證となるにすぎない。しかし、卷一の左の歌によつて、  
 「乏」をトモシ類に訓むことは確定的なものである根拠が見  
 られる。

麻裳よし紀人乏母亦打山行き来と見らむ紀人友師母

(一五五)

即ち、この一首によつて、「乏母」≡「友師母」が確證され  
 る。

トモシ類は、情意表現の形容詞の持つ特長として、集中に  
 於いて、多種の意義に用いられている。同語異義の形容詞で  
 ある。

集中、トモン類は、本来、「乏」字の有する、とぼし、少しの意義の他に、めづらし、うらやまし、ゆかし、なつかしあいらし、慕はし、いとし、こいし、の意義に解せられねばならない場合がある。勿論、これらの異義は、全くの別語としての異義ではなく、基本的語感としては、同一源の語感から発生して来ているものであつて、唯、それぞれの語感の発生した感覚個体と、その対象素材との心理的な距離感の大小の差、また感覚個体の思惟が、対象素材に向つて切迫しようとする意欲の充実度の相違によるものである。

即ち「乏」の本来の意義である欠乏感——自己と対象との差異の発見を発生源点とする、自己敗北感、不充足感、劣等感が、自己内に発生したままの姿で内在するのみの状態の場合に、欠乏感として意識されて、とぼし、少しの情意表現として表される。なお、その差異が、極端に甚しく大きな場合は、唯、めづらし、と意識されるのみで、内在にとどまる。即ち、これらの場合は、意識が、欠乏感として、内攻し、内在するのみである。

しかるに、その欠乏感が、内攻内在の域をのりこえて、感覚個体の外に向い、対象素材との均一、更に合致を希求する方向を採る時、うらやまし、ゆかしの情意表現として表されて来る。更に、この意識が、全く外に向い、対象に対して、強く動き出して行く時、あいらし、の情意から、なお一層強く、慕はし、いとし、こいし、の意義を生じ、感覚個体の意識は、対象に突進し、没入せんとする強烈な情意を表

現するまでに至る。

かくの如く、自己と対象との、相対的關係を基準とする意識の方向、深度、強度の差異が、同語異義を生ぜしめるに至ることは、特に、情意表現の語に於いて、多く見られるところである。

こうした同語意義の発展経過を通じて、トモン類を、「心充たない」と口訳し得る。

かくみる時、①②③④の歌に於ける、「乏」の訓義は、在來の訓義より比較的無理のない妥当性を持つて来る。

しかし、なお、「無乏」についてその訓義を決定的なものとするためには、「無」の用法の訓義が解決されねばならない。実に、この「無」字の存在が、在來「乏」字の本来的訓義をはずして、スベナシ類の訓義をなされた契機をなしているものである以上、「無乏」の訓義は、むしろ、「無」の取り扱いに鍵を求むべきである。

「無」については、説文解字に「此本蕃廡之廡、李斯借為有無之無、後人尙其簡便故皆从之、有無字本从亡」とあり大字典に、「亡は失亡滅亡の義よりとりて、無の古字也。ナシに用ふ」「無は亡也有無に對しナシといふ通り也。秦時より蕃廡の字をナンに用ふといへり」また「無林」の条に「無林古文蕃廡字、有無之無即用无字、秦以無林作无、李斯又改作無後因之」とある。「無」「無」「廡」共に元、しげり、さかんの意であつたものが「無」は無(ナシ)の意に転じ亡に通じ用いられるに至つたものである。

「乏」について、玉篇に、「五、今作乏」、説文解字に、

「春秋伝曰反正為乏房法切」とあり、  
乏<sub>二</sub>五、正の反対の形で、とぼしい義。正道に反す

る匱乏を招く道である故に、いうということである。大漢  
和辭典(諸橋徹次博士編)には「乏」の条に、「〔集韻〕乏、  
一曰、匱也(禮、月令)季春命有司、振乏絶、〔註〕暫無曰  
乏。〔孟子告子下〕空乏其身、の用例をあげ、とぼしい、  
ない、むなしの意」としている。

「匱」また、むなし、とぼしいの意にて

「乏匱」の熟語あり、「無饑寒乏匱之患」(国語、周語下)

「常恐乏匱者」(漢書、董仲舒伝)の用例がある。なお、

「乏絶」の条に「賜貧窮振乏絶」〔疏〕暫無曰乏、不讀曰絶」  
(禮、月令)とある。

「乏」は、とぼし、むなしの義であるが、なほ、上記、註  
また、疏に「暫無曰乏」とある如く、相通して用いらたもの  
ではなからうか。唯々大漢和辭典に引かれてゐる用例(乏困)  
(「行李之往来、共其乏困若亦無所害」〔左氏〕)「乏盡」(「資糧  
既乏盡、薇蕨安可食」〔劉琨扶風歌〕)、「乏少」(「若有糧  
食乏少、皆賑給之」〔北史隋高帝紀〕)「乏餒」(「爲民貧  
窮、發倉廩振乏餒」〔漢書魏相位〕)「乏人」(「今漢雖乏、  
人陛下獨奈何與刀鋸之餘共載」〔漢書袁盎伝〕)「乏資」  
(「高后時、齊人田生、遊乏資以畫奸澤」〔漢書燕三劉沢  
伝〕)「乏糧」(「吳兵乏糧、饑數欲挑戰、終不出」〔史記  
周亞夫伝〕)等の熟語は、すべて「乏」をとぼしいの義として

用いられている。

なお「乏」の第二の義は、官職の空位の義を表わすとして  
左伝の左の文が引用されている。「韓厥日敢告、不敏撰官承  
乏」〔註〕言欲以己不敏撰承空乏。「承乏」は官位に就くこと  
を謙遜している。暫く自分からその空位を補充する義と説明  
されている。即ち空乏は空位の意であり、意義上より、乏<sub>二</sub>  
空が考えられ、前記、註疏の「暫無曰乏」と共に、乏<sub>二</sub>無の  
相通の用法が認められるのではなからうか。

このことを認め得るとすれば、無乏の無は不読文字の用法  
として考え得る。

森本治吉博士の萬葉假名分類(岩波講座日本文学所収)萬葉  
集の研究―用字法を中心として(一)に従い、

「(乙)不<sub>二</sub>完讀<sub>一</sub> ↓ (一) 讀音不足(多字少音) ↓ ②不<sub>二</sub>讀<sub>一</sub> ↓

(B) 義用

の項に入れて考えられる。唯、この場合、更に、これが、  
「(伊) 異義字ノ附加」か、「(呂) 同義字の重用」の項  
に入るかが問題となる。

上記の如く、無<sub>二</sub>乏を認め得たとしても、この場合「無」は  
あくまで「無」として使用されているのみであり、「乏」の  
意義が無の意義に転じて用いられている用例によつてのみ成  
立するのであつて「無」が主であり、「乏」は従となり「無  
乏」は「無」の意義の方に統合され「乏」をトモンと訓む場  
合のものとしては、「(呂) 同義字ノ重用」には入り得ぬ。  
むしろ、「無」によつて、「乏」の意を強調する意義の用法

として、「(伊) 異義字ノ附加」の項に入り得る。

しかしなお、「無乏」を、「乏」字の意義及び集中の他の用例からして、トモシと訓むことが、スベナシと訓むことより、妥当であるとしても、なお、集中、他には「乏」字のみにてトモシと訓まれているのに、いかに、この四例が、柿本人麿集及びそれに類するグループの中にある特殊用例歌とはいえ、「無」字を附加することは妥当と考えられない。

ここに於いて、更に、不説文字の用法として、同じく森本博士の分類中の「(A) 讀用↓(a) 音↓(s) 單語↓(イ) 上」の項に入り得る訓法が考えられる。

この用法として、「由移」(7・1256)「他回」(46  
123)「間亂」(7・1265)「孤戀」(10・1921)「於凡  
(7・1333)の用例をあげられている。なお、その他「可  
鶏」(7・1413)「久草」(14・3530)「志萎」(2・  
38) (以上「解釈と鑑賞」百九十三号森本治吉博士「萬葉  
假名の讀み方」)  
「湯移」(11・2673)「湯徒」(11・2670)等の用例が  
あり、いずれも「讀の有る文字に不讀文字を附加する事によ  
つて、その「讀む文字」の讀法を指示する場合を云ふ。即ち  
附加された文字の讀用に不讀文字が役立つてゐる場合」

(同上、萬葉集の研究)の用法である。

これと同じ用法として「無乏」の訓が考えられる。即ち、  
集中の他例ではすべて、トモシと訓まれている。「乏」字を

特にこの場合ムナシと訓むべきことを明示するために頭音  
「ム」を「無」でもつて指示したものと見るのである。なお  
「乏」字がむなしの義をも有することは、前述の通りである。

なお、集中、ムナシの類の語は、

「空物」(3・442)「空家」(3・451)「空應有」(6  
578)「空事」(11・2466・2755)「空言」(12・30  
63)及び、「牟奈之伎母乃等」(5・793)「無奈之久可  
在」(19・164)の八例で、「無」を表音文字として用い  
ているのは、一例のみである。但し、集中「無」・「牟」及  
び「武」は相通して用いられており、その用例は多い。この内  
「無」の用字は、数量上からは、他の二字より少い。しかし  
左記の用例が見られる。

名詞に、三例 (内、語頭にあるもの二例) 「無良等理」  
(17・4008)「無何有乃郷」(16・3851)「久草無良」  
(14・3530)。  
副詞「可無奈我良」(17・4003・4004)  
動詞、「周無」(住む17・3909)「曾無」(始む19・4175)  
「多能無」(憑む5・904)「奈具佐無流」(慰むる14・114)  
(以上語尾)「阿射無加受」(あざむかす5・906)「可伎無氣」  
(かきむけ19・4191)「左無美」(寒むみ17・3953)  
助動詞「家無」(5・872)「良無」(2・194・12・31  
92・18・4106)「奈無」(20・4438・4441・44  
76)「無」(20例)

かくて「無乏」を、ムナシと訓むことは決して、無理な訓法でなく、むしろ、用字法に添つて、最も妥当な訓であるとなし得ると思ふ。

○ 「無乏」が、古来、今日に至るまで、スベナシ類に訓まれていることは、この訓が、初記した四首の情意にも、一応は相当し得ており、類似の情意を含む集中の歌の中に、スベナシ類の語が多く用いられていることにもよろう。しかし、これは、も早、一種の郷愁的訓法にすぎない。用法上からは、やはり、否定さるべきものである。

ただ、トモシ類の訓によむことも、この四首の情意に、全くそぐわないものではなく、用字法からしても、スベナシ類の訓よりは、なお妥当性を持つに近しいとい得る。

しかも、この訓もまた「乏」をトモシ類に訓む他の用例の魅力に牽かれてゐる点が多く、唯「無」の用法の解決に於いて定着し得ぬものを残す結果となつてしまつてゐる。

ムナシ類の訓は、以上の二訓と比較して、用字法に添つて最も無理のない訓である。唯この訓は集中に用例が少く、今日までの万葉集読者にとつては近親感の薄いため、歌の情意を理解鑑賞する場合、直ちに受け入れられにくいものがあるであらう。特に情意表現の語に於ける新訓の理解は慣性的旧訓が大きな障害となる。

しかし、語感の問題は、慣性を除去して、検討されねばならない。

スベナシ、トモシ、ムナシ、の三語は、いずれも、欠乏感

また、空虚感の情意を表す語であり、特に、恋の場に於ける男と女との果し得ぬ思いへの焦燥を契機として、表われる場合が最も多い。それは、夕方まけても待ちつづける恋であり、夜も、唯夢にのみ求め得る果し得ぬ思い、遂には、恐るべき忌を破ることさえ心とせぬ願いを抱き、また、せめても妹の門辺までのみでもとさまよひゆく情意の世界である。こうした場における情意は、スベナシ類の語でも、トモシ類の語でも、必ずしも表現し得ぬことはなかるう。しかし、特に、ムナシ類の語は、この場合、もつとも深く、強く、この情意を表出しし得得ると思ふ。

トモシ類の語は、いずれに解するとしても、個体内に発生した感覚の動きが、対象の方に向う方向性を持ちながら、なお、その個体内で内攻してゐるのみで止る。その感覚は、対象に対して、初めから距離をそのまま保持した位相にあるにすぎぬ。

スベナシ類の語は、この点に於いては、対象に迫る指向性を持ち、対象に対して、感覚の方向は、強く流動し、更に真正面から、その対象にぶつかつて行つてゐる。

こうした、感覚の指向性が、対象に向つて流動し、その対象に合致し、合一し得る場合は、無の情意は、その瞬間を契機として、みずからを充実することによつて、成就し、結実する。しかるに、スベナシ類の語の表現は、その感覚が、その対象に到達した瞬間、その情意を喪失し終り、無限の奈落へ転落して行く弱さを持つてゐる。



ムナン類の表現もまた、スベナン類の語と同様に、その感覺の指向性は、はつきりと、対象に到達している。

しかし、ムナン類の情意は、この場合、更に、対象を大きく超越していく、そして、その感覺の指向と、対象との合致合一への希求に、矛盾する、非合一性の存在を認識し、更に、その認識を包有しつつ、更に大きく、絶対無の世界に補充する様相を秘藏する。これは、悲恋の世界を乗り越えて、人間悲哀の極地へ向い、人間存在の限界をさえ乗り越えて、絶対無の世界に到達せんとする。

ムナン類の語は、この絶対無の世界への参入を象徴する諦観の姿相を表出する。諦観は、現実認識の極地への到達であり、更に、より深く、より大なる、純粹な、人間感覺の再生産への出発点であり、道程である。

スベナンは、この諦観前に於ける自己喪失の様相を表している。即ち、それは、悲哀の窮極に於ける意欲の放棄を包含する。

ムナンは、その諦観への悟入の姿相を表す。同じく、悲傷の極に至りつきながらも、その悲傷性の具有する欠乏感の正当な認識の上に立つ、再充実への意欲的復帰の意識の再生産を包有する。

○ 万葉集中に見える、ムナシの語が、万葉人によつて、ここまでの意識を以つて用いられたとは必ずしも云い得ないかも知れぬ。しかし万葉人の情意に、スベナン類の語の境地を乗

り越した、ムナン類の語の境地の發生が絶無であつたとは、また云い切れぬであろう。むしろ、それらの芽生えを見ることは、万葉人の思考の鋭利さ（—それは、また、現代人の思考の鋭利さとは、おのずから異なる形相を持つとは云え—）からしても、決して、安定さを欠くものではなからう。

それは、即ち、万葉集中、かなり多く用いられている。スベナン類の語の持つ悲哀感の積雲の中から、かすかに、芽生えを現しかけていた、ムナン類の感覺—情意を表現すべく、本来、ムナシの字義を有する「乏」字を用いながら、他面、万葉集中、「乏」字が古来、トモン類の語として訓まれて来ている、その訓との混同をさけるため、この場合の「乏」字の訓法を明示する手段として、ムナシの頭音ムを、「無」字音の借用によつて示したものと見るのは、いかがであろうか。

「無乏」——ムナン類の訓は、上述の通り、この語の含有する情意の姿相に対する考察からもまた、その安定性を立證し得ると思う。

○ なお、「恋無乏」(①②)「恋者無乏」(③④)の「恋」

「恋者」の訓法についても、古来、諸説あり、これは「無乏」の訓法の最終的決定に自ら関連がある。故にここに附説することとする。

①の場合

コヒハスベナシ(拾穂・考・略解・新訓・總釋・全釋・

總索引)

コヒコソマサレ(新考〔恋社益〕)

と、名詞に訓むもの

コフハスベナシ(代匠・古義・定本・全註釋)

コフハスベナキ(童)

コフルハスベナサ(童)

と、動詞に訓むものがある。

②の場合、すべて動詞に訓まれており、

コヒスベナカリ(代匠・略解・古義・新訓・總釋・全釋

・總索引)

コヒテスベナミ(拾穂・新考・定本・全註釋)

コフハスベナミ(童)

③は、すべて、コフレバスベラナミ、と訓まれている。

この内、①の歌に於いて、「恋」を名詞に訓むことは、この歌の訓としては、何ら支障はない。唯、情感の流動の点から云えば、勿論、動詞に訓む方が強く、かつ適切である。

問題は、三首を通じて、動詞に訓む場合に生じて来る。

コヒ、コヒテ、は、いづれも、連用形であり、四段活の動詞とみても、また、上二段活のものとしても相通である。然る

に、コフハの場合は四段活動詞の連体形であり、コフルハ・コフレバ、は、上二段活動詞の、連体形、及び、已然形である。こうした混在が、同じ巻十一中にあり、しかも、更に同じく、人麿集中にある、この三歌の訓にあり得てよい筈がない。

動詞「恋」については、武田祐吉先生が「動詞恋ふは上二段と解せられ」と論定されている通り、万葉集中、すべて、上二段活に訓まれてをり、①②③の場合も、また当然上二段活に訓まるべきものである。したがつて、コフハ、は、コフルハ、と訓むべきである。

唯、この場合「ル」一音の増加のため、「無乏」の訓音数に直接影響を及ぼして来、スベナシ類の語による場合、一句中に、一音のゆるみが生じてしまう、古来、多く用いられている。コフハの訓は、一句の重点をスベナシ類の語に置きながらこの音調の破れを防ぐために、便宜的に訓みならわれて来たものであらう。

前述の理由により、当然、コフルハ、と訓む場合、一句の音調上からも、ムナシの訓はなめらかに、その定位を得る。

以上の論據により「恋無乏」「戀者無乏」「無乏」は、左の如く訓むことに、最も定位を得るのではなからうか。

① 恋無乏——恋フルムナシサ

② 恋無乏——恋フルムナシサ

③ 恋者無乏——恋フルハ、ムナシミト

④ 無乏——ムナシミト

なほ、①の場合、恣フルハムナンシとも訓み得るが、終止形止よりも感動度の強い、連体形止の方が万葉集の訓法として適切と思う。即ち、終止形止の場合は、歌の情意が、殆ど終止し終るにすぎない。これに對して、連体形止の形は、その詠嘆を拡充し、その恣を、広く、大きく、諦觀的に凝視する姿体を表す。

②の場合も、①の場合と同じ根拠から、連体形止にて（a）コフルムナンシと訓む。この訓に於いても、古来の訓、コヒテスベナミに據つて、（b）コヒテムナンシとも訓み得るし、また（c）コフルハムナンシとも訓み得る。①の訓は条件的に、以下の句を引き起すにすぎない。しかるに、歌の重点は上二句にあることからしても、（a）の訓、即ち第二句に於いて、強い詠嘆を以つて、休止する表現にして、初めて、この歌の重点が、クローズアップされるのである。

（c）の訓もまた、二句切れではあるが、これは、①の場合と全く同様の根拠によつて、この場合も、適切性は薄いと云よう。

③の場合は、やはり、古来の訓法の線にそえば、コフレバムナンシト、となる。しかし、このように、条件的に取扱うことと、コフルハ訓とんで、主格的に取扱うことは、おのずから、この歌の享受の重点に對する異見がその根源をなすのである。既に②の場合に於いて述べたと同様に、この歌に於いても、一首の重点が、即ち、作者の情意の重点が、「恣者無乏」の点にあると見られ故に、その訓もまた、その重点

性を表現する。コフルハの方に扱いたいと思う。唯、ムナンシトの形によつて、上三句が、下二句に對して、また、条件的關係を表わしているものの、一首全体の情意からすれば、下句二句は「恣者無乏」の情意からの派生的姿体にすぎない。なお、ムナンシト、という語は、万葉集中に全く同例がない、しかし、形容詞語幹十ミトの形は、万葉集中、多くの用例があり、全く無理な訓ではなからうと思う。

④の場合は、③の検討をそのまま、充当することによつて、言足りよう。

武田祐吉博士の近業

「古事記説話群の研究」

（明治書院 昭和廿九年十月刊）

「古事記研究 帝紀攷」につぐ「本辭攷」として本辭の文献学的検討及びその説話群の性格論に重点がおかれており、特に祭祀性について詳論されてゐる。古事記研究の貴重な道標である。

「萬葉集全講」上卷

（明治書院 昭和三十年二月刊）

全卷を通して、新しい見解のもとに簡潔に註釈し、更に「万葉集全註釋」の誤謬の訂正及びその後の研究による補足改訂を主眼としていられる。全三卷よりなり、下卷には万葉集辭典が所収される。